

詠む広場

毎日歌壇

加古川市 伏見 昌子
石蹴ってみても変らぬ暑さかな
岡山市 仲野 恒彦
電柱の影さへ頼る炎暑かな
福知山市 衣川 登代
頂上のくづれて落ちしき水
松山市 井上 保子
料理の手休め神輿を出迎ふる
弥富市 富田 範保
噴水や男はいつも待たされて
日高市 金澤 高栄

須賀川市 伊豆 周治
生垣の上に日光浴の蛇
町田市 枝澤 聖文
サイダーの泡たちあがる真昼かな
鴨川市 西宮 鉄雄
返信はいつも絵葉書夏見舞
帰省子へ草ばうばうの田圃かな
真岡市 下和田真知子
風薫る野鳥図鑑に葉の痕
宇治市 濱岡 学

明石市 村上 絹恵
落蟬を拾へばジジッと声を立て
和歌山市 武友 朋子
蟬鳴くやピアノの音の止んである
東京 吉田 芳子
サンダルの片方残る秋の浜
松山市 村重 香霞
夏の灯や一冊の本読む無言
東京 青野 曆
スイカ食ふ種の弾丸皿へ飛ぶ
茅ヶ崎市 森 全太郎

米子市 長田 遼平
冷麦はいりこ汁なり母遠し
北九州市 土居 康二
水割りのグラスのしづく夜の秋
東久留米市 矢作 輝
降り立ちし単線の駅草いきれ
奈良 高尾山 昭
夏の朝護岸工事の土緒し
京都市 根来 滋
打ち水や小紋の裾をひよいと上げ
三鷹市 鶴田 朋行

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

白線の内側に立つ その先は海だったかもし
れない朝だ 名古屋市 森本 有

△評▽駅のホームである。白線は現実と幻
想の境界になる。その先は海だったのか。
心が揺れる。あこがれを胸に今を生きる。

恋よりも先にアイスは溶けるので君をほった
らかしにした夏 岐阜市 山上 秋恵

△評▽アイスのほうを急いだのだ。「ほっ
たら・かしに」という句またがりがうまい。

薄明に息子とふたりパン食めば逃亡前夜のこ
とくはなやぐ 神戸市 浅田 拓史

青年がひとり海へと叫びおり(波じゃないん
だ)いのちの裂け目 東京 稲山 博司

ショッピングモールのすみでひそやかに親し
さをもつ非常灯あり 津市 川原田明子

先生は海に入って死のうとし四十年後私に本
を貸す 横浜市 あ や

ダブリンの友に分けたいこの空の澄み切って
いるもう半分を 豊中市 ね お

君のYes欲しくてどうにかなりそうではち
きれそうな風船の犬 名古屋 屋 河

柔らかな光わたしの手を握り続けてほしい湖
の底 横須賀市 森久保りりか

空やべえ。ジッタイがねえ、マジヤベエ。だから
listen空を見上げる 福岡市 藤田 美香

わたしからあなたに罪は渡せずに窓が一つも
ない懺悔室 名古屋市 よ だ か

△評▽古いヨーロッパの教会の告解室は小
さな密室で互いの目しか見えない。「あな
た」すなわちイエスはそこに。

遠き揺れるある白昼はグノモンとして向日葵の
立ちあつづくる 東京 吉岡 耕大

△評▽人間を導く時計としてのヒマワ
リ。その大なる影の向こうが揺れる。

胸腺を失いしこともう君は帰らないこと空を
知ること 前橋市 栗山ミユウ

きみとまた然るべき小惑星で元素として巡り
逢う幻想 横浜市 街川 二級

青葉騒 信号を待つ僕たちにひとりひとりの
心臓がある 秋田市 吉行 直人

千年を錆びるがごとく曼珠沙華そのあかがね
の臉をひらく 東京 山野ゆかり

花のみる走馬灯には人間がいらないと思う 死
者の季節へ 国立市 蔵 井

オルガンは空になっても鳴り止まず僕は荔枝
のように歌った 岡山市 松井 度

暗闇の背より獣の翼生ゆ月光は半身しか照ら
せない 甲府市 村田 一広

雨の降る兆しに街はつつまれて此処はたしか
に夏のうちは さいたま市 住谷 正浩

年齢を重ねてわかるような気がしていたけれ
ど気のせいみたい 堺市 一條 智美

△評▽句またがりを生かしたリズムが屈折
した思いの言葉に現実味を与えている。ふ
とつぶやいたような言い方に説得力がある。

いち度きりの町に忘れた手袋のようにふっと
思うきみのこと 名古屋市 田中 靖人

△評▽上の句の「手袋」の比喩が新鮮で印
象に残る。初恋の思い出かもしれない。

靴紐を結べばリボンに縦結び上手な恋を教え
てほしい 宮崎 門田 藍子

手のくぼを逃れて落ちた一錠が見つからなく
て今日が始まる 札幌市 橋 晃弘

5個あれば3個食べてる3個なら2個食べて
いる3人家族で 豊後大野市 菜 瑞 菜

天泣に少し想った君のこと大きな虹よ君住
む街へ 京都市 小林 香織

透き通る新玉ねぎのスライスの旨くゴーヤの
伸びゆく季節 豊中市 雛 豊 栗

救急の意識戻りし父が母にかけた言葉は「も
う寝ていいよ」 東京 河野多香子

常温を避け冷暗所にて管理されるにんげん、
昨今の夏 池田市 黒木 淳子

月山の中腹の池の尾瀬河骨いつよりいかにこ
こに生ふるや 鶴岡市 佐藤 繁子

かみあはぬ会話よりも耳遠き友は電話でハッ
ピーバースデー歌ふ 京丹後市 山副美佐子

△評▽古い友人で、率直なやりとりが許さ
れる仲なのだ。ほほ笑ましいというにとど
まらず、温かく心に響く声が聞こえる。

次々とお城の堀に飛び込んでトリアスロン
都市型開催 大阪市 小熊 光子

△評▽大阪城トリアスロンは東外堀を泳
ぐの有名。昔の人は驚くに違いない。

市房山が真向ひに見ゆる亡父の部屋鴨居に掛
かる空母「飛龍」は 熊本 風岡 睦子

傘の柄を握りバサバサ振り落とす誰かの涙が
まざっているから 札幌市 橋 晃弘

墓塚の裏に廻りて妻を抱く夢の中でも喉かわ
きけり 名古屋市 加藤 國基

愛らしき人型ロボが指示を受けにわかに襲い
くる近未来 新発田市 飯田 英範

海の家解体されて基礎は錆び三畳ごとの区画
が残る 東京 井芹 純子

花柄でもストライプでもない気分生意気そう
な白のシャツ着る 三重 中山由賀子

炎天にふとん干しあげ寝ころべば二倍にふく
れてやけどしそうに 福知山市 衣川 登代

金魚へと赤チン塗りし指先をいまも夕日にか
ざしてみたり 貝塚市 濱田 美子

うたは奏でる

ッセーじだ。言葉の陰に隠れていた言葉を、言葉が照らし出す。
・ふだん喋る機会のない人からペンを借りおめでとうと書いて返した
おめでとうという言葉自体をペンの持ち主に贈ったのではない。その言葉を書いたことによって特別な価値を得たかのようなペン、それを返したわけだ。意味の伝達を超えたところにも言葉の力を認めているからこそ可能な行為だろう。
これらの歌に私は、言葉そのもののへの信頼を感じる。その信頼に、ひとりの詠み手として励まされるような気持ちになった。(そのの・たろう) 歌人

詩歌便り

- ◇第7回BR賞＝小川未夜子「Be clear」(小島なお歌集『卵降る』書評)、牛尾今日子「壊れていく世界で」(瀬口真司歌集『BEAM』書評)
- ◇第46回現代俳句評論賞＝山根もなか「俳句は第一芸術である―知覚・形式・運動の条件」
- ◇第27回現代俳句協会年度作品賞＝庄子紅子「仕草」30句

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。